

Title	史學概説(内藤智秀著, 章華社發行)
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.170(352)- 171(353)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0170">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0170</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 史學概説

(内藤智秀著)  
章華社發行

『歴史は動いて止まない有機的なものである』。曾つて我が國で異國人蔑視の傾向から、『夷狄は人間か如何かを確める爲めに黒船に乗込み「兩手には確かに十指があるけれども、足は蹄に似、好んで血を啜る」と報告した。蓋し、足の蹄とは靴の事である。血を啜るとは葡萄酒を意味したのであつた。又、萬延年間米國に渡つた新見氏一行の人々は……大統領たる主人の妻ともあらうものが、人を招いて接待するのに、『半裸體又は片はだぬぎとは何事かと云つてその日記に書いてある。然し今日では其武士の子孫は盛に蹄を踏み鳴らし、五色の酒まで飲んでゐる。そして婦人でも振袖を切り落し、將に半裸體にもなる。そして足もあらはに大道を濶歩するのである。』(九九—一〇一頁)

時勢の變化は恐ろしいものである。當時の認識不足は、今では笑ひ草に過ぎないけれども、今でも當面の問題は勿論のこと、遠い過去の問題について考察する場合には、この様な例が中々少くないのである。かゝる誤謬を犯さない様に歴史上の眞理を的確につかまへんがためには、この複雑な社會事相の研究に對する豫備知識を一通り心得て置かねばならぬ。それには内藤智秀博士の近著『史學概説』を讀むがよい。

本書第一章に於ては歴史の本質を解明せんがために、その意味、種類等を説き、歴史及び史學に關する諸種の定義を列擧し、最後に『歴史とは人類行動の變遷を研究する學である』(一九頁)とし、

日本、支那、西洋に於ける史學の變遷を述べ、第二章に於ては歴史を解釋すべき諸派の史觀を説いて簡單なれども史學史の主要に通ぜしめ、その間にも絶へず日本との對照を怠らず(三三頁)、マルクシズムの唯物史觀に對しては『我國では此種の思想に對し尠くとも有識者は免疫であるから驚かされる事はなからうが、幼き青年に對しては充分に誤解のなき様理解せしむべきで、それが歴史教育家の任務でもあらう』(三八頁)と警告し、最近の學問ゲオポリチークにも觸れ(四〇頁)、ランケ以後の史觀をとき、リッケルトによつて大成された現代史學の基本的概念をも綜觀した上、『彼等は形式主義の學者で、歴史の價値關係は彼等によつて始めて主要な問題となつたが、然し此意見では未だ歴史の統一が完成されない。若し出來たとしても極めて奇怪な不均合なものとなる』(六一頁)と斷言してゐる。

第三章に於ては歴史教育が論ぜられ、現代史の重んずべきことを説き、世界大戰中、ロマン・ローランが獨軍の美術品破壊を非難したのに對して、ハルトマンが「ドイツ人一人の生命はフランスの美術全體よりも貴重であると答へた」ことを記し、又『被服廠に火がついた。これを消さなければならぬ。それが現代史の問題である。歴史が亡き人の行爲言動のみを吟味してゐる内に被服廠は燃えて行く。コミュニニストは赤い旗を押し立て、青年の肚の中へ食ひ入つて来る。可愛い一人娘は悲しき母をのこして赤へ行く。歴史家は此の現代に生きながら現代を理解せず、現代社會に後ろ向きになり、只幻影的過去に生きるならば、自己購着でなければ生活遁避でなくて何であらうか』(六七頁)と味なことを云

ひ、要するに、クローチェと共に『總ての眞の歴史は現代史である』から『時勢に適應する歴史教育をなすのには時に後る向きになりながら、又前向きになつて國民指導の任に當らなければならぬ』(八二頁)とて我國の歴史教育の缺陷を指摘し、トライチケと共に『現代史を研究するには一般史家としての資格以上に一般に該博なる教養を必要とし、一面に此の歴史家は政治上にも充分の理解を要すると共に、藝術、哲學、科學、經濟の如きものに對しても徹底的な理解を有し緻密な研究を以て史料を参照する根氣を必要とする』(七一頁)ことを教へて、歴史教育家は又歴史の研究者でなければならぬことを力説してゐる。

第四章に於ては『歴史家に對する定石』としての方法論が説かれ、自己の性能に適應する様に主題を決定することの必要から(九一頁)その研究上の難易等を初學者の手引として親切に記述し、更に史料の蒐集、分類、批判、史實の綜合等を説明し、氏自からその學位論文の作成に苦心せられた實例を詳細に引用し、宛かも臨床講義を聴かされてゐるかの如き趣がある。それから歴史の動因たる諸要素及び表現方法にまで及し、第五章では史學の補助科學について有益な記述が見られる。

以上に於て初學者が心得置くべき重要な知識は略ぼ網羅せられてゐるが、最後に民族史觀なる一章が本書の結論をなしてゐる。これは氏がその學位論文の結句として『民族主義こそは永久的で絶對的なものであると思考する』(日土交渉史三七七頁)旨述べられてゐる氏の最も得意とする史觀の展開であつて『日本史は日本民族史であると考へる』(二六七頁)理由を知ることの出来る最も

有益な論文である。我等はこの一書に於て、二個の著述を併讀し得ることの幸をもつのである。聊か慾を云へば、校正は今一層嚴密であつてほしかつたが、それも目障りといふだけの程度のものである。一二の例を擧ぐればリトル(Emile Litte)マイヤース(Myres)が和洋兩語とも氏の前著『史學概論』の誤植をその儘踏襲し(本書三八頁、概論二九頁)、ハンチントンの書名 Civilization and Climate が同様に前後し(本書三九頁) Hippolyte Taine の名前が間違つて居り(本書四四頁)ロビンソン教授が今もコロムビア大學教授であるかの如く思はしめる(本書七三頁)のは、不注意だと言はゞ言へよう。定價二圓。(間崎万里)

増訂 歐近世外交史 下卷 (林毅陸著)  
新版 一誠社發行

上卷(本誌第十二卷四號本欄)に次いで出版された中卷は、二月革命に始まり、クリミア戦争とイタリーの統一に於けるナポレオン三世とカウールの活躍、丁抹問題乃至獨佛戦争に於けるビスマルクのプロシヤ・ドイツの建設外交、東歐の改造とサン・ステファノ條約及びベルリン條約の締結に至る經過が説かれてゐる。

この下卷は全く新著とも見るべきものであつて、戦前に於ける均衡外交の樞軸たる三國同盟と露佛同盟の成立過程、伯林公會後の東方問題、エジプト及びモロッコ問題を繞ぐる列強の離合集散、日露戦争の餘波として奥國のボ・ヘ二州合併、バグダード鐵道の敷設とイタリーのトリポリ併合等は、所々に補正を加へられた舊著の再録であるが、その中露佛同盟に關する一章は從來知られな